的勝利を收めなかつたら、新しい困難の數々は茲に始まるだらう、日本は其の希望に反して增大する戰爭のため尙虎の背に乘つてゐる」と。又イギリスの「ノース・チャイナ・デイリー・ニュース」によれば「支那側は結局徐州の陷落することを豫期してゐるからそれ程の打擊とは感じまい、支那が重要なことは戰場で勝利を得ることではなく最後の結果にあるとの信念を固持してゐる限り支那は長期戰に於ける抵抗を繼續する能力ありと見てよからう」と述べてゐる。

内閣情報部五・二四　情報第四號

（朝鮮總督府遞信局聽取）

―漢口U・P新聞電報放送（二十日）―

一、最近の公表によれば支那機は大阪上空を飛翔しなかつた、防問地は長崎、福岡、佐世保海軍根據地等で、これらの上空に於ては支那軍大本營政治部宣傳班で作製した總計百萬の傳單を撒布した。この中には日本の勞働者、農民、智識階級、商人、兵士、海員等夫々に對する特別の訴へ狀も含まれてゐた。この大部分は日本の作家鹿地亘の起草したもので其の他のステートメントは現に漢口にゐる日本軍捕虜の手に成るものであるが、彼等は支那側の良い待遇に支那に對する氣持ちを變へてゐる。

二、U・Pに示された書面に依ると襲擊機は一時間許り雲の中を盲目飛行した、同編隊は海線色のマルチン双發爆擊機より成り指揮官HSUHUAN・SHEGは昨夜夕食後蔣介石の指令を受け十九日午前二時三十分漢口を出發（支那沿岸の某基地）に向つた、そして二十日午前零時十分蔣介石に對し無電で忠誠を誓ひ、この重要任務に參加することを許された光榮に對する感謝の意を表明したる後日本へ向つて離陸したものである。

三、徐指揮官は四時間半に亘る飛行中大本營との無電連絡を續けたが、U・Pに示された彼の發信せる無線電報は次の如きものである。

(一)二十日午前零時十三分＝雲高く月を見る能はず完全なる盲目飛行なり
(二)同日午前零時十五分＝全機好調、編隊完全なり
(三)同日午前零時二十四分＝日本沿岸を認めたり
(四)同日午前零時三十四分＝長崎其の他に於て百萬のリーフレットを投下せり、日本の上空飛翔中敵機高射砲等の防空施設を發見し得ず

この直後三機は日本の沿岸を離れ午前五時十七分支那沿岸を認めた。飛程一千六百哩各機は殆んど最高速力で飛行した。

四、今朝U・Pは漢口軍用飛行場に於て參加爆撃機二臺の歡迎を見たが、漢口市民は午後の號外發行迄何も知らなかつた。この遠征は支那五千年の歴史に未曾有の壯擧である、支那軍は忽必烈の時代に一度日本を襲撃したが數萬の遠征軍は悪天候に遭遇しジャンクを沈められ生き歸つた者僅かに三名であつた。支那紙の號外は劃期的壯擧なりと賞讃してゐる。

五、支那軍スポークスマンは日本軍が徐州の西郊に到達したことを認めたが、支那側陣地は有利なりと稱して、日本側の支那軍包圍説を反駁した。彼は記者團にカンタ。タンネンベルヒに於ける包圍殲滅戰直前の獨。露兩軍配置を示す地圖を提示し、如何なる點より考へても之を隴海戰線に適用することは出來ない、即ち

(一)支那軍は徐州北方台兒莊の日本軍を依然支へてゐる
(二)徐州東方地區は時折襲撃して來る者を除き日本軍の侵入を許してゐない
(三)徐州東南方に於て日本側は卓寧北方に弱小部隊を有するに過ぎない
(四)津浦線南段の日本軍進撃は固縛に於て停滯してゐるから、支那軍は尚廣闊の支配權を有し行動は完全に自由であり、包圍されたなどとは笑止の沙汰である。しかも西方開封には有力な後備軍を集結してゐると

尚永城より隴海線へ到達せんとした日本軍は支那陣地の弱點を衝かんとして數回方向を換へた後支那側に撃退された、又徐州防衛軍の一部はHSUHSIENへ進撃し數千の日本兵を殺したが、日本軍は死物狂ひになつて毒ガスを使用した、瓦子口では日本軍戰車數臺を破壊した、たとへ徐州が陷落しても支那側陣地に危險はないと語つた。外人軍事オブザーバア達も支那軍の位置は決して不利ではなく巧妙な作戰次第で戰況を有利に展開することも可能であると見てゐる。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

内閣情報部五・二四　　情報第七號

米紙の徐州戦評

同盟來電—不發表

ニューヨーク二十三日發、

ニューヨーク・ヘラルド・トリビユーン紙は二十二日の紙上に「日本軍の言分」と題する社説を掲げ支那側に同情する立場から徐州陥落の重要性を過小視して左の如く述べてゐる

「徐州の陥落は決定的なものでこれから蔣介石軍を全滅させるのは易々たるものだと日本軍は云つてゐるがこれは軍部が今度の勝利を強く國民に印象付け様としてゐることを示すものだ、若し支那の主力部隊が士氣を失はず豫定の退却を完了し、新たに徐州西方の防禦陣を敷いたと云ふのが事實だとすれば日本軍の言分を其儘認めるわけには行くまい」